

ラグジュアリーの羅針盤

COMPASS OF LUXURY

存在することが、機能になる

1981年、ソットサス氏は国際的デザイナー集団「メンフィス」を結成します。結成の夜、ボブ・ディランの「メンフィス・ブルース・アゲイン」がレコードで回り続けていたことが名前の由来です。出自からして、格式より偶然と気分を選ぶ集団だったのです。メンフィスは「よい趣味」への反逆でした。たとえば素材です。「カールトン」に使われたのはマホガニーなどの高級素材ではなく、大衆的な店の内装や台所に使われてきた安価なプラスチック・ラミネートです。細菌の顕微鏡写真を思わせる「バクテリア」柄まで自作しました。最も安い素材で、最も忘れがたい家具をつくる。価値は値札からは生まれなことを示したこの逆転こそ、ラグジュアリーを考えるうえでの急所でもあります。

東京・アーティゾン美術館では、展覧会「エトトレ・ソットサス——魔法がはじまるとき、デザインは生まれる」が開催されています。20世紀イタリアを代表するデザイナーであるエトトレ・ソットサス氏（1917-2007）の全貌を伝える、日本初の大規模回顧展です。

原色のパネルが斜めに交差し、古代の祭壇のようにそびえ立つ「カールトン」。カラフルな輪が連なる「オダリスク・トーテム」。人の抽象形にも見えてくるキャビネット「カサブランカ」。収納家具なのか彫刻なのか、あるいは冗談なのか。解釈しようとするほどこちらの常識が揺らいでいきます。

出世作はオリベッティの赤いポータブルタイプライター「ヴァレンタイン」。パケツ型のケースに入れて持ち歩くことができ、オフィス以外でも広げたくなるような楽しさがあります。機能主義の全盛期に、彼はすでに反逆の種を仕込んでいたのです。

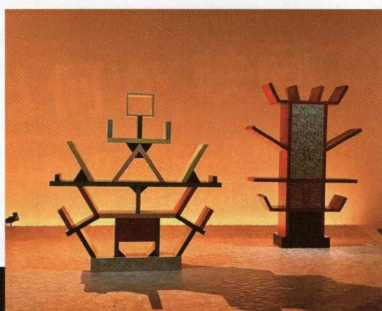
真つ先に反応したのはファッション界でした。シャネルのデザイナーも務めたカール・ラガーフェルド氏が、モノコの住居をメンフィスの家具で埋め尽くしたことは象徴的です。誰にでもわかる上品さではなく、わかる人だけが読める逸脱こそが魅力になりました。21世紀の高級空間は、ベージュ、石、木、余白へと傾いてきました。しかし静謐も、反復されれば無難な背景に変わります。高価だが、語ることが少ない。美しいが、記憶に残らない。ソットサス氏はそこに別の許可を与えます。もつと変でよい。もつと色があつてよい。もつと矛盾してよい、と。

近代デザインが削ぎ落としてきた呪術性や遊びを、彼は取り戻そうとしました。展覧会タイトルの「魔法」とは、その回復の別名でしょう。彼の家具は、

そこに在るだけで空間の気配を変え、会話を誘い、世界の見方を揺さぶるのです。

展示会場には、「メンフィスの機能は存在することだ」という一文が掲げられています。役に立つこと、効率が良いことではなく、そこに在ることそのものが機能である——家具についての言葉のほずが、有用性で人間までが査定される時代には、私たち自身への激励のようにも響きます。考えてみれば、贅沢とはもともと、必要や実用の外側にしか生まれないものでした。ならば、役に立つことを証明しないまま、ただそこに在ることを許されるって、これほどの贅沢はないのかもしれない。

カールトン(左、1981年)と
カサブランカ(右、1981年)



オダリスク・トーテム(1964-66年)



ヴァレンタイン・ポータブル・タイプライター(1968年)



「エトトレ・ソットサス——魔法がはじまるとき、デザインは生まれる」(東京・アーティゾン美術館、2026年6月23日-10月4日)

中野香織

富山市出身。服飾史家。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。最新刊『エレガンス入門』(ちくまブリーマー新書)。パレスホテル東京のファッション文化ツアーつき宿泊プランTokyo Fashion Chroniclesの監修を務める。

